ては居なかつた筈である。すると、この地上の二星の悲戀悲話は吾が郷土に深い關係かある。それだけ懐しい唄でないか。

（四）

來いといふても行かりよか佐渡へ　　佐渡は四十余里波の上。

感興の深い民謠だ。裏日本の大海原に秘められた物語が偲はれて來る。

（五）

わしが若い時や津島まで通つた　　三宅堤で夜が明けた。

萩原から三宅堤を經て津島に至る情味たつぷりな郷土の人達の行動が偲ばれるよい民謠だ。

可愛いあの子の爲なら三里の道もなんのそのてふ白熱の戀心も、思へば昔の夢であつたかと、老農の述懐である。又この民謠に接して懐舊の情新なる現存の人もあらう。

當年の可憐の美女は今如何。華かな彼の夢も茫々としてはかなく、古墳は徒に雜草のみ生ひ茂つてあらう。

（六）

殿さお出よ八日の晩に　　藥師參りと家を出る。

地方色の横溢してゐるものだ。

（七）

ようも生えたよこの田の草は　　なぎにぐはいに澤瀉に。

（八）

暑やかなしや六月土用に　　二番田の草血の涙。

西は伊吹に、東は御嶽あたりに入道雲が立ちはだかつてゐるが、こびりついたやうにびくともしない。

燒きつける太陽に水田は熱池となる。風は少しもなく稻の葉づれさへない時、唄を開く者は一沐の冷氣を感ずるであらう。

明治天皇御製

暑しともいはれざりけり煮えかへる

水田に立てる賤を思へば。

農民の身の上を思はせられた大御心誠に畏き極みである。

（九）

後生願ふも田の草とるも　　末の爲ぢやと思やこそ。

（十）

今日は暑いに早よ戻りやんせ　　冷しうどんで待つわいな。

紺の前だれ、あかねの襷、世話女房のかひ〳〵しさ。

（十一）

植ゑて三尺穂に出て五尺　　さても見事なこの早稲は。

子にもたとへつべき愛撫の耕作。待たれるものは鎮守の祭禮である。

（十二）

腹の立つ時や茶碗で酒を　　呑んで暫く寐やなほる。

酒の功徳を讃えた上戸黨の喜ぶ唄だ。

◆白　ひ　き　唄

（一）

白はひけども小麥は厭よ　　二番ぶるいの粉ばなしを。

（二）

白をひきやこそお手にもさはる　　晝は見るばか思ふばか。

あの娘可愛いやと夜を待ちかねて遊びに來た若衆は何の顧慮の暇もなく直ぐあの娘の夜なべの白挽を手傳ふ。そこに白をひきやこそお手にもさはると、戀情を慰やす愉悅があつた。

異性からの感覺の享受は若人の甘い夢だが、現代の男女の針の先のやうな鋭い感覺に比較して見るとき、これには如何にも大まかな悠長さが自然に觀取されるでないか、これも亦民謠として絶調たるを失はぬ。

この唄に連れて思ひ出されるのは萬葉集東歌の一首だ。

稻つけばかゝる吾が手を今宵もか
殿の若子がとりて嘆かむ

（三）

後生顧ふより臼ひきなされ　　二升と三升ひきや五升になる。

昔の人にも輕妙なユーモアがあつた。

（四）

内のねえさん粉をひきや眠る　　團子食ふときや眼が光る。

（五）

四十だ四十だと今朝まで思ふた　　三十九だもの花ぢやもの。

夕陽咨ちんとする瞬時の光彩か、將に散らんとする姥櫻の暫時の濃艶か。

（六）

盆か來たとて何うれしかろ　帷子はなし帶はなし。

七

赤いべべある帶あるけれど　可愛いがられる親がない。　蕉村

父母のことのみ思ふ秋の暮　一茶

叱らるゝ人羨まし年の暮　子規

鳥の子の飛ぶとき親はなかりけり

雜

（一）

惚れて通へば千里が一里　逢はず戻ればまた千里。

（二）

信州信濃の新そばよりも　わたしやあなたのそばがよい。

（三）

男ぶりより金より心　心さへありや金いらぬ。

（四）

何をくよ〳〵川端柳　水の流れを見て暮らす。

勤王の志士高杉晉作の都々逸だ。序に名士の都々逸を擧げやう。

九尺二間に過ぎたるものは　紅のついたる火吹竹。　頼山陽

雪の肌に氷の刄　露の命の捨てどころ。　小松帶刀

龍田川無理に渡れば紅葉が散るし　渡らにや聞かれぬ鹿の聲。　久阪玄瑞

五

樂は望まぬ苦勞は承知　苦勞仕甲斐のあるやうに。

六

一寸眺めは奇麗だけれど　末の頼みにちらぬ雪。

七

伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ　尾張名古屋は城でもつ。

八

尾張百萬石名古屋のお城　金のしやちほこ雨ざらし。

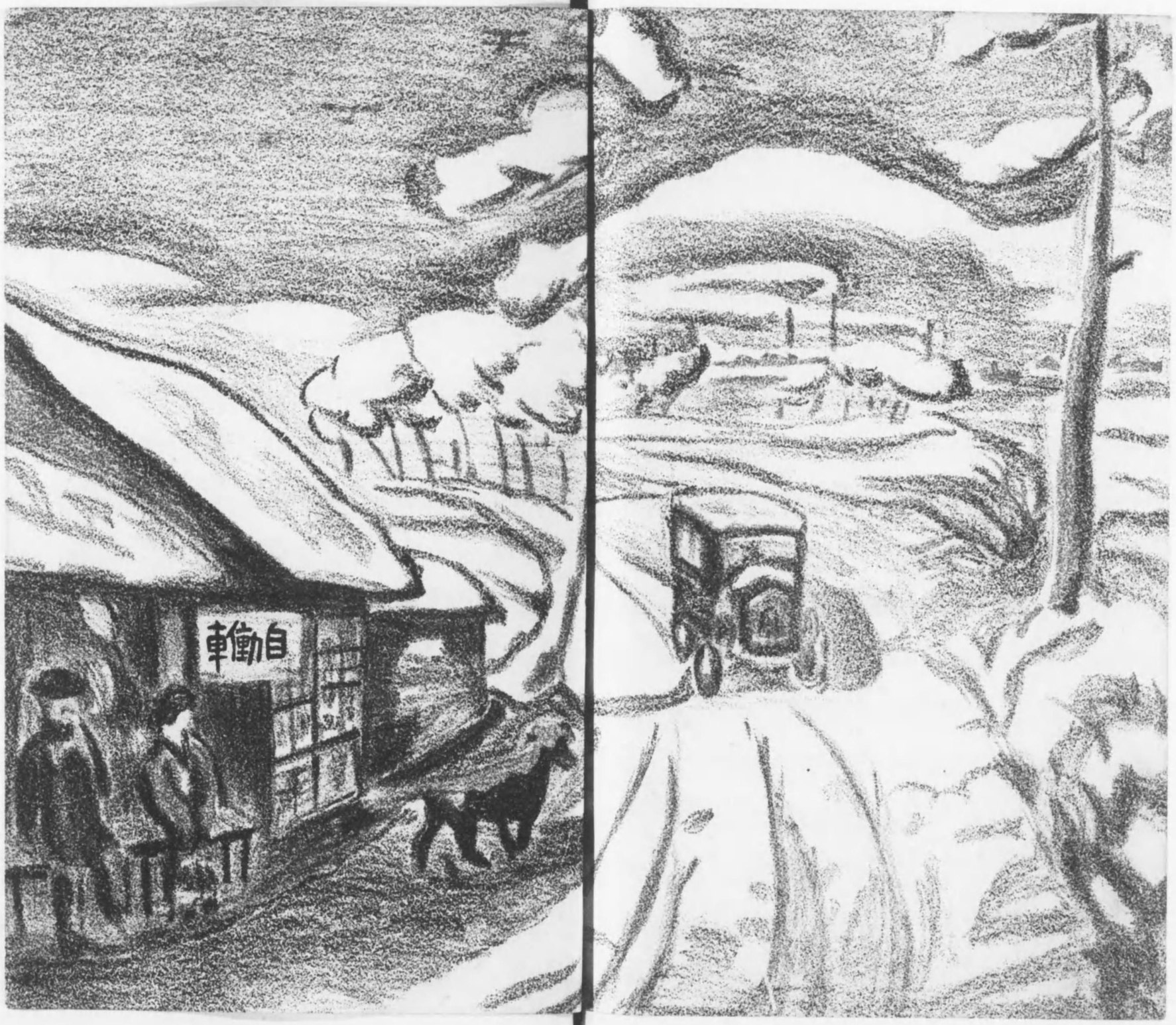
（完）

萩原町誌終

昭和四年十二月廿八日印刷
昭和五年一月一日發行

【非賣品】

發行所　萩原町教育會
愛知縣中島郡萩原町大字戸刈五百十五番地
編輯兼發行者　川瀬實治
愛知縣中島郡萩原町大字萩原壹番地
印刷者　後藤賢市
愛知縣中島郡萩原町大字萩原壹番地
印刷所　後藤印刷所


自働車

終